

パネル発表をお聞きして...

館岡洋子(早稲田大学)

<オルガ・バスケス氏>

- ・ LCM=社会的教育実践、実践研究=社会変革のためのもの
- ・ LCM: 成績向上+アイデンティティの(再)構築
- ・ マクロ&ミクロレベル、支援者&被支援者の学び

<竹内身和氏>

- ・ 言語的マイノリティを教室内でどう支援できるか→すべての資源を利用する
- ・ 多様な他者の資源をどう引き出すか→支援者(教師)の力量?
- ・ 多言語国家である北米の事例から何が学べるか

■論点

- ・ 支援者(ボランティア、教師、研究者、行政)のあり方⇒二項対立を越えて
- ・ 個人を丁寧に見ることと社会の中に位置づけることの関係

2013/12/16

1

CEFR

(Common European Framework of Reference for Languages; ヨーロッパ言語共通参照枠)

- ・ EU諸国で外国語の学習者の習得状況を示す際に用いられるガイドライン
- ・ 目的: ヨーロッパのすべての言語に適用できるような学習状況の評価や指導の方法の提供
- ・ 2001年の刊行以来、35以上の言語に翻訳
⇒cf. 日本: JFスタンダード

2013/12/16

2

複言語主義(plurilingualism)

- ・ 欧州評議会(Council of Europe)による造語
- ・ Plurilingualism(複) ⇔ Multilingualism(多)
Pluriculturalism ⇔ Multiculturalism
- ・ ~そこでは新しいコミュニケーション能力が作り上げられるのであるが、その成立にはすべての言語知識と経験が寄与するし、そこでは言語同士が相互の関係を築き、また相互に作用しあっているのである。(略)その能力の中から一定の部分を柔軟に取り出して使うこともする(CEFR 吉島ほか訳 2004: 4)。

2013/12/16

3

複言語能力

- ・ 複言語能力: 日常のコミュニケーションにおいて、ニーズを満たすためにひとつ以上の言語によってコミュニケーションを行う能力(Coste et al.1997)
 - ⇒ 部分的能力を肯定的にとらえている
 - ⇒ 完成された母語話者並みの能力の獲得を前提としていない
 - ⇒ 仲介者(mediator)の役割が重要になる
L1からL2、L2からL1への一方向的通訳ではなく
複層的かつ同時共存的なもの

2013/12/16

4

今後の課題(日本語教育の視点から)

■支援現場では⇒二項対立を越えて

- ・ 学習者が「複数の言語を柔軟に取り出せる」ような場面の創出
 - ⇒ 媒介者(mediator)の存在の重要性
 - ⇒ 媒介(mediation)が必要となる場面の洗い出し
- ・ 媒介: 被支援者が同時に支援者になるコミュニティ
 - ⇒ すべての人がmediator (二項対立でなく同時共存的)

■人材育成

- ・ mediatorの養成(グローバル人材?)
異質な他者を理解し協働する力⇒「言語」教育から人材教育へ

■Questions

- ・ mediationが生かせる場づくりとは?
- ・ mediatorの養成は?

2013/12/16

5